

ひろがれ、 『どんど晴れ』への 思い！

もう一度、物語続編へ熱いコールを

平成19年に放送された『どんど晴れ』。岩手を舞台にした物語はNHK連続テレビ小説初のことでした。老舗旅館に飛び込んだ都会育ちのヒロイン・夏美がさまざまな壁を乗り越えながら成長していく姿、物語に一貫して描かれる「見えないものを信じる勇気と力」は、まさに岩手・盛岡人の気質に通じるものがあり、高視聴率となって全国に盛岡を発信しました。

当時、出演者として、また舞台裏の一人として関わった(株)パネット代表取締役・畑中美耶子さんにエピソードを聞くとともに、本格始動した『どんど晴れ』続編誘致活動について紹介します。

今や四季を通じて観光客が訪れる岩手の観光名所となった「小岩井農場の一本桜」。写真提供：小岩井農牧(株)



(株)パネット代表取締役・畑中美耶子さん／フリーアナウンサー、方言指導、一人芝居など多方面に渡って活躍。児童劇団「CATS きゃあ」主宰。

舞台裏からみた『どんど晴れ』

『どんど晴れ』の中で、ヒロイン・夏美が盛岡の老舗雑貨店「ござ九」で買い物をするシーンがありました。この店の奥さん役で登場したのが、畑中美耶子さんです。そこで、番組収録の過程で接した出演者や制作現場の様子、舞台裏で感じられたことを伺ってみました。

「私が出演させて頂いたのは、ほんのワンシーン。でも、撮影は1日ばかりなんです。ロケ場所選ばれたお店の方は、出演しなくても撮影が終わるまで待機してはならないし、準備や片付けなど大変だったと思います。他のお店も含めて、地元の皆さんは本当に協力的に動いていました。画面には映らなくても、いろんなところで地元の人が番組に関わっていたんです。新幹線から降りてくる乗客やさんさ踊りの観客なども、皆エキストラですから、思わぬところに知人が出演し

ていたり。これは、地元が舞台の番組ならではの面白さですよ。」

故郷への愛着があるからこそ方言への思い入れ

幼少の頃からずっと盛岡に根を張って暮らしてきた畑中さんは、生粋の盛岡っ子。フリーアナウンサーとして活躍する一方、岩手の方言のスペシャリストとして、数々のドラマや映画の方言指導にあたっています。なんと、盛岡が舞台となった歴史小説『壬生義士伝』では、ドラマと映画の両方で主役俳優に盛岡弁を指導しているのです。

『どんど晴れ』では、NHK放送局が手配したスタッフが全体の方言指導を行ったのですが、話の核となる加賀美屋大女将カツノを演じる草笛光子さんの部分だけは、畑中さんが録音したものをベースにしてあるそうです。ところが、出演者の一人として撮影の待ち時間を過ごす間に、夏美役の比嘉愛未さんから盛岡弁の特徴的な言葉について訊ねられたり、番組の方言指導スタッフにコツを教えてほしいと頼まれ「方言指導の指導」をしたり…。

「ボランティアよ(笑)。一口に盛岡弁といっても市内だけで10通りもあるほど。微妙な違いが、地元出身だからわかるんですよ」と畑中さん。ドラマ内の方言に関しては、電話やメールなどを通じて、友人知人からいろんな声が届いたのだそうです。

「やっぱり『もりおがだど』って注目してご覧になるんでしょうね。『お

どんどん晴れ ロケ地巡りツアーの様子

盛岡ふるさとガイド3名の案内で
ロケに使われた場所を巡りました。



夏美さんの下宿先の喫茶「イーハトーブ」のモデルとなった「ふかくさ」。



夏美さんが出勤時に通った道「柳の道」
(中津川周辺)



開運橋たもとからの岩手山を眺める参加者たち。



ロケ地にはパネルが設置されています。

べだ人がででじゃ」とか『おめ、方言まちがって教えてだっけ』とか。直接指導に携わっていないとはいえ、小さなことも見逃せませんでした」と畑中さんは振り返ります。

全国に伝えた「盛岡」 あちこちから届いた反響

地元はもちろん、盛岡を離れて暮らす人たちにとって、故郷の懐かしさを「方言」の響きで感じることができたのが『どんどん晴れ』。映像だからこそ

の技といえます。そして、中津川や岩手山など、盛岡らしい風景の数々を各地にたくさん届けることができたのは、全国放送の連続番組ならではの「岩手山が映るだけで、ああ懐かしいと思っただ」。「盛岡を離れて長いので、小岩井の一本桜なんて知らなかった」「番組を見て、何年ぶりかで、さんさ踊りの時期に合わせて帰省しようと思った」など、畑中さんに届いたメッセージには、盛岡の今をあらわす風景に心を揺さぶられた人の言葉が幾つもあったと

います。

「盛岡市が全国で行うイベントに同行して各地に赴くと、『どんどん晴れ』を見たとか、盛岡出身だとか声をかけてくる人がいっぱい。本当にいろんな面で番組の効果があつたと思います。番組がきっかけで盛岡を訪れた人もたくさんいたはず。ただ、『どんどん晴れ』の効果をできるだけ引き伸ばすために、手軽に買える『どんどん晴れ』グッズなどをお土産品としてつくるのか、もつと番組をしつこく利用しても良かったんじゃないかと思えます。だから3年経った今、続編誘致が実現し、もう一度盛岡の宝物を発信していけたらいいですね。でも、日々景観は変化しているでしょう。岩手山を望むスポットなど、盛岡ならではの風景を街中からなくさないようにすることも大切です」と畑中さん。「強いラブコールを送って、ぜひ実現しましょう」と、積極的な続編誘致を望む言葉が続きました。

『どんどん晴れ』続編に向け 皆さんの力で後押しを！

昨年10月「いわておかみ会」や「岩手県観光協会」をはじめとする20団体で『続・どんどん晴れ』誘致協議会を設立。名誉会長に盛岡市長、会長に盛岡商工会議所会頭が就任し、すでに誘致に向けた事業が始まっています。まず、昨年11月末に、住民参加の『どんどん晴れ』ロケ地巡りツアーを開催。市内はもちろん二戸市、紫波町、奥州市など県内各地から40名が参加してドラマの

軌跡を辿りました。ツアーに同行した

当会議所地域活性化支援チーム和井内信行リーダーによれば、参加者からも続編を望む声が多く聞かれたとのこと。

「要望によって動くわけではないですが、盛岡広域圏における住民の盛り上がりを図り、その声をNHKにお伝えして続編を実現したい。物語は主人公の夏美さんが若女将になった時点で終わっており、その後の姿が見たいという希望がとて多いんです。観光振興もさることながら、不透明な経済状況、雇用不安など、全体に気持ちが萎えている観があるので、それを切り替えて皆が元気になるため、明るい話題の一つとして、続編誘致を実現したい」と和井内さんは力を込めます。

協議会では、番組へのアンケート及びファンレター募集、会議所ホームページでの『どんどん晴れ』検定などの各事業を展開中。さらに来年度は、横断幕やステッカーなどの作成、市民等による『どんどん晴れ』トークセッションの実施などを予定しており、市民の皆さんの目に見える形で誘致活動を進めていきます。

家族の絆や伝統の大切さ、おもてなしの心やあきらめない心が感動を呼んだ『どんどん晴れ』。その言葉の語源は、どんどん焼きに由来するとも言われ、「厄を祓う」意味もあるのだとか。まさに盛岡の未来につながる礎として、番組の続編実現に向け、市民皆さんの手で活動を盛り上げていきましょう。